

# 附属学校園における主免教育実習アンケート調査の分析

大谷晶久\*<sup>1</sup> 寺側喜國\*<sup>2</sup> 野田和宏\*<sup>2</sup> 上野國博\*<sup>3</sup> 前野栄子\*<sup>3</sup> 井口 均\*<sup>4</sup>

\*<sup>1</sup>連携コーディネーター \*<sup>2</sup>地域支援スタッフ \*<sup>3</sup>実習アドバイザー \*<sup>4</sup>教育学部

## 1. はじめに

附属学校園における教育実習の充実が求められる中で、現状については様々な問題があることが取り沙汰されて久しい。現在の本学部主免教育実習によって、授業実践力をはじめ、教師として求められる実践力や資質が実際にどの程度獲得されているのであろうか。まず学生自身がそのことをどのように評価しているのかを知る必要がある。また、昨年度開催された附属学校園と学部の教員合同での主免実習交流会において、実習担当教員より実習生が様々な問題を抱えている状況が報告され、実習担任教員が実習指導を通して学生をどのように評価しているかについても把握する必要があるが生じている。学生に対する否定的評価を少なからず耳にするが、それは一部の学生に限られた問題なのか、あるいは一部の実習担任教員に限られた評価なのかについてもある程度明らかにしておかねばならない。

そうした実態把握をもとに、教育実習の教育的効果を一層向上させるため、今後の教員養成機能の充実に向け、各附属学校園と学部が協働して取り組むべき改善策とは何かを考え、改善への試行を積み重ねていくことが重要と考える。

今回はそのための一つの試みとして、今年度、学部に配置され連携コーディネーター、地域支援スタッフ及び実習アドバイザー（全員が公立小・中学校教師として長期の教職経験あり）を中心に、アンケート調査の分析を行った。その意味で、今年度から開始した「教員養成機能の充実」に向けた「連携・協働プロジェクト研究」の一環としての取り組みと位置づけている。

## 2. 調査の目的及び方法

### (1) 目的

第一は、附属学校園における主免教育実習を振り返り、教育実習生自身に実習への心構えをはじめ、実習成果等を自己評価させ、附属学校園での指導や学部での授業のあり方等についての課題・改善点を自分なりに考えさせることである。そのことにより、学生自身の目からみた実習課題の達成度及び附属実習・学部教育に対する問題点等を検討する。まずは昨年を引き続き、学生の現状認識を聞きとり、附属学校園での実習及び学部教育の改善への糸口を探ることが目的である。

第二に、実習生を直接指導した実習担任教員に主免教育実習を振り返ってもらい、教育実習生、附属学校園での指導、学部授業のあり方等に対してどのような評価や改善点への指摘がなされているかについて検討することである。

それらにより、学ぶ側の学生と指導する側である担任教員相互の見方をつき合わせることで一致点やズレが明らかになり、現状理解や改善点について新たな気づき生まれるのではないかと思われる。

## (2) 方法

### ① 調査対象

【平成 24 年度各コース 3 年在籍の主免実習生】

- ・ 小学校主免実習生 122 人（回収率 97%）
- ・ 中学校主免実習生 68 人（回収率 92%）
- ・ 幼稚園主免実習生 31 人（回収率 100%）
- ・ 特別支援主免実習生 15 人（回収率 100%）。但し、特別支援実習生については昨年度と同じアンケート調査のデータ（現 4 年生）を使用した。特別支援学校の主免実習は、前期（3 年時 9 月）と後期（3 年時 2 月）の二期に分けて実施されているために、10 月から 11 月での集計作業に間に合わないために、このようなかたちとなっている。従って、平成 23 年 3 月に同様のアンケートを実施した結果を用いている。

【附属学校園の実習担任教員】

- ・ 附属小学校担任教員 26 人（回収率 100%）…副担任も含む。
- ・ 附属中学校担任教員 21 人（回収率 77%）…教科担任も含む
- ・ 附属幼稚園担任教員 5 人（回収率 100%）
- ・ 附属特別支援学校担任教員 16 人（回収率 100%）…副担任も含む

※学生評価は、今年度前期分（9 月実施）での実習についてのものである。

### ② 調査用紙の配布・回収

- ・ 主免実習生、担任教員共に、アンケート用紙配布を 2011 年 9 月末に行ない、回収は 10 月中旬から末日にかけて行った。
- ・ 回収は、実習生の場合、各附属校への提出物と一緒に実習担任教員へ個別に用紙を封入した状態で提出した。実習担任教員の場合も同様に個別に封入した状態で、教頭先生へ提出した。

### ③ 調査内容

【主免実習生】

- ・ フェイス調査項目
- ・ 主免実習に関する基本的事項について
- ・ 教職への志望について
- ・ 実習資質確認リストに対する自己評価について
- ・ 教員としての自分の指導力について

- ・教育実習を終えて、附属学校園に要望することについて
- ・教育実習に関して、教育学部および学部教員に対して要望したいことなど、全 25 項目。

#### 【実習担任教員】

- ・フェイス調査項目
- ・主免実習に関する学生の基本的な心構えについて
- ・主免実習に求められる基礎・基本的知識・技能の習得状態について
- ・実習資質確認リストに対する指導的振り付けについてなど、全 29 項目。

### 3. 主免実習アンケート調査の結果について

10 頁以内という許容枚数上の制約があるため、主免実習生及び実習担任教員に対する全調査項目についての集計結果を本稿に記載することはできない。そこで、両者に共通する質問項目である、今後の改善課題に関する項目（例えば「教職に対する構え・姿勢について」「教職志望」「実習への準備状態」「学部教育及び附属学校園への改善要求」など）を中心に取りあげて検討する。

なお、本稿で掲載するグラフで使用する数値等は、コース別及び校種別の傾向を主としてみるために割合（%）を用いる。コースの学生数では特別支援学校コースの学生が最も少なくても 15 人（小学校コースの 1/8）であり、校種別の教員数では附属幼稚園が最も少なくても 5 人（附属小学校の 1/5）である。従って、一人がもつ割合への寄与率がコースや校種により違うため、読みとり内容も多種の偏りがあることを予めご承知願いたい。

また一部の主免実習生のグラフについては、昨年度の調査結果と比較したものがある。昨年度も主免実習生については同一のアンケート調査を実施しており、今年度とほぼ同じ人数規模の回収数を得たが、既に指摘した事情により、特別支援学校コース所属の主免実習生のデータは昨年度分には入っていない。

#### （1）教職に対する構え・姿勢及び担任教員からみた心構えについて

##### ①主免学生の教職志望傾向

#### 【全体傾向（年度別）】

図 1 は全学生の回答を年度別に集計したものである。教職を「望んでいる」「どちらかと言えば望んでいる」は、平成 23 年度が 77%、平成 24 年度が 78%と学生の教職志望は高い。授業をつくることなどの楽しさを実地に体験した成果と考える。理由にも、教職に対する見方や考え方、使命感や責任感などを意識したものが多く。

教職を「望んでいない」「どちらかと言えば望んでいない」実習生は、自己の適性や性格面からの不安、また最初から別の職種を目指していたことをあげている。

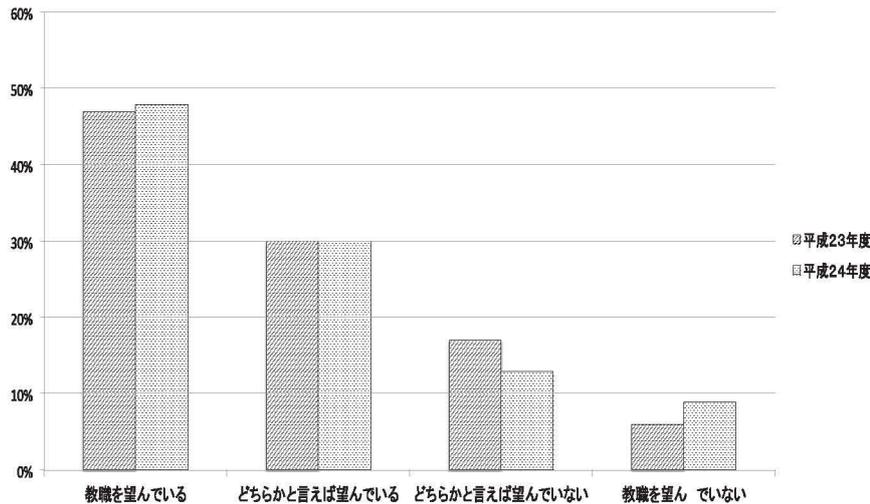


図1 教職志望か否かについての年度別回答

### 【校種別傾向（H24年度）】

#### i) 小学校

教職に就くことを「望んでいる」54名、「教職をどちらかと言えば望んでい」43名で計97名（79%）に上る。その主な理由は、

- ・子どもたちと一緒に過ごして、改めて子どもたちの成長に関わる仕事がしたいし、やりがいがあると思ったから。
- ・実際に小学校で実習をして、子どもと接したり授業をしたりする中で、楽しさや楽しさを実感し、夢への思いが強まった。
- ・教師の仕事の充実感を知ることができたから。

などがある。自分なりに描いていた「教師像」を実際に体験することによってより具体的に理解したり、今後自分で取り組んでいかなければならない課題を明確にしたり、より教育現場を目指そうとする夢や憧れを実現したいという意識に向かい始めているのではなかろうか。

「教職を望んでいない」「どちらかと言えば望んでいない」者は28名（21%）いる。主な理由は、

- ・他の職種を希望しているから。
- ・教員の難しさを感じた。
- ・教職というものを改めて考えてみると、向いていないと感じたから。

などがある。教職以外の職種を考えている者と教職の困難な面に目が向いて自らの不適格性を強く意識している者とがいる。教育実習を実際に体験したからその気づきであろう。

#### ii) 中学校

教職に就くことを「望んでいる」31名、「どちらかといえは望んでいる」17名で、計48名（69%）である。その主な理由には、

- ・生徒と関わる中で、生徒のちょっとした変化を見ていくことで、人としての

生き方など、間近で伝えられると思うから。

- ・生徒の持つ可能性を引き出す支援をする教師という職にやりがいを感じた。
- ・想像していたより生徒のことを可愛く思えてきて、教職のやりがいのようなものを生じることができたから。

などがある。専門教科での実習授業等を通して、授業の面白さや思春期に入った生徒の変容の姿に触れた事柄と結びながらやりがいや魅力を記述している。

教職を「望んでいない」「どちらかといえば望んでいない」は20名(29%)で、約3割に及ぶ。理由は小学校の場合とほぼ同様である。

### iii) 幼稚園

教職に就くことを「望んでいる」16名、「どちらかといえば望んでいる」10名で、計26名(90%)である。その主な理由には、

- ・子どもの成長発達の面白さを改めて見るとともに、それに大きな影響を与える教師の責務の大きさにやりがいを感じた。
- ・もともと教職に就くことを目標として、この大学に来たため、実習を通して課題も自分なりに見つけることができ、より夢への気持ちが高まったから。

などがある。教育実習で子どもと活動を共にして、幼稚園児の特性に直接触れることができた魅力などを述べた記述が多い。

教職に就くことを「望んでいない」2名、「どちらかといえば望んでいない」1名で、計3名(10%)である。その理由の記述も「望んでいない」2名は別の職種を志望しており、もう1名は理由無回答であった。

教職志望が高く、理由の記述にも幼稚園教諭や保育士を目指そうとする意識が明確に表されているのが特徴である。

### iv) 特別支援学校

教職に就こうと思っている者がやはりほとんどである。教職に就くことを「望んでいる」12名(80%)、「どちらかといえば望んでいる」は0名であり、教職志望者が多い。主な理由もほとんどが「やりがい」を意識したものとなっている。

教職に就くことを「望んでいない」「どちらかといえば望んでいない」は2名で、他の職種を志望している。

## ②担任教員による教育実習生の基本的な心構えに対する評価

### 【全体傾向】

図2は、教育実習に対する学生の基本的な心構えについて実習担任教員の回答を示したものである。全体的にみると、「感じられた」「どちらかと言えば感じられた」と回答した教員は88%、「どちらかと言えば感じられなかった」「感じられなかった」と回答した教員は12%で、ほとんどの実習生が基本的な心構えはできていたと思われる。

その主な理由として、

- ・緊張感を持って実習に臨んでいた。常に学ぶ姿勢があった。
- ・事前指導で様々なことを学んでおり、それを生かそうする意欲が感じられた。

などがある。このように、基本的な心構えはおおむね肯定的な評価を受けている。

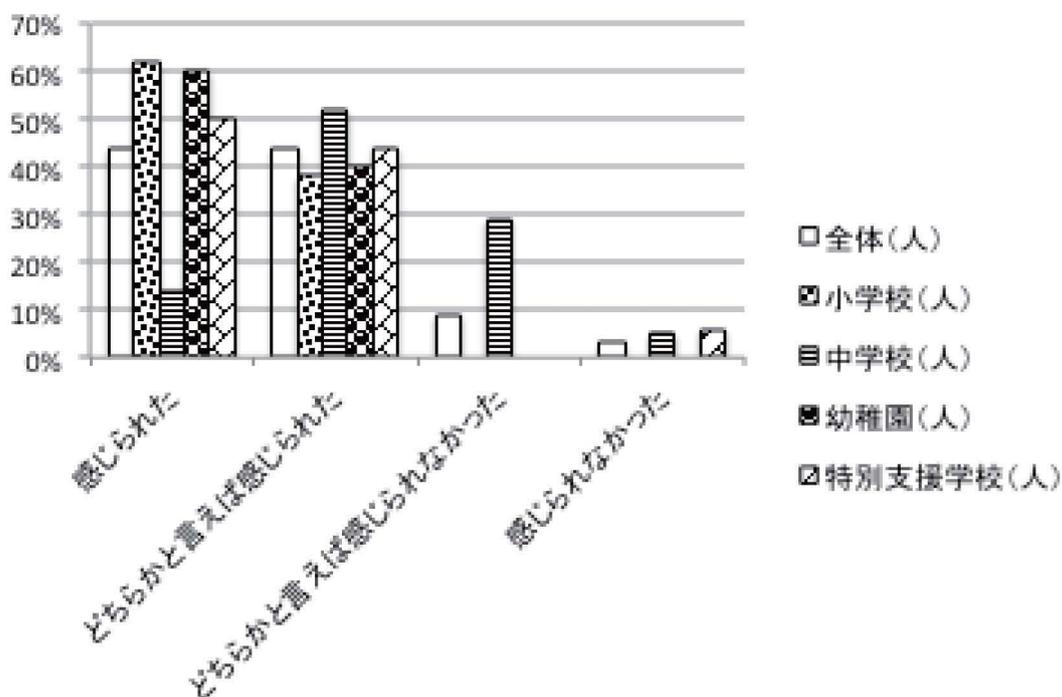


図2 学生の基本的な心構えの有無に対する実習担任教員の評価

### 【校種別傾向】

目立った傾向として、中学校では「感じられた」「どちらかと言えば感じられた」の評価が66%と最も低く、「どちらかと言えば感じられなかった」「感じられなかった」の評価が34%と3割を超えている点が、他校種との顕著な相違点となっている。否定的評価を回答した場合の理由も、生徒と接することを恐れていること、指示をしないと動けないこと、意欲が見られないなどが指摘されている。

### ③教職に対する構え・姿勢及び担任教員からみた心構えについての小括

#### 【主面実習生の教職志望傾向】

教職に就くことについてのアンケートの記述回答を見ると、教育活動の実際を実習で体験することは、教職に対する理解を深めたり卒業後の職業について改めて考えたりする貴重な機会となっている。

教職に就くことを目指して入学したと思われる者は、教育実習で、より教師として進む道を確認するものとしたという自覚が読みとれる。また、教師の仕事をやりがいや喜びであるとして、自覚的に方向性を見定め始めた者もいる。附属学校園での実地に即応した指導による成果であろうと考えられる。

一方、教育実習を経て、教育の困難さを体験し、教師となることへの自己の不安感や適性をより一層意識してしまった者、教職に就くことは当初から視野に入

れず、別の職種に進むことを最初から決めている者もいる。教員養成目的学部としては、学生が在籍する年限の中で、教職のもつ魅力を感じさせる指導の方策を探らなければならないのではないだろうか。

#### 【担任教員からみた主免実習生の心構えに対する評価】

幼稚園、小学校、特別支援学校の場合、担当の指導教員より高い評価を受けているが、中学校の場合は評価が低い。指導の対象が思春期にある生徒であるために、より高度な知識が求められるのと、心理面での指導の難しさが関係していると推測される。中学校での重要な課題は、生徒指導とコミュニケーション能力の育成ではなかろうか。

学生には、生徒指導の理論と同時に、子ども理解についての実践的指導ができるようにすることも必要である。したがって、学部授業では、理論を受けての子ども理解がより具体的に深まるようにすることにポイントがある。そのためには、教育実習の前に実際に子どもと接する機会を設け、子どもの実態をつかませることが必要と考えられる。

### （２）指導力の自己評価，課題意識，事前準備状況について

#### ①主免実習生による実践力の自己評価

##### 【全体傾向（年度別）】

図3は全校種学生の指導力の有無に対する回答を年度別に集計したものである。教育実習を経験して自分の指導力を「ある」「どちらかと言えばある」としたのは、平成23年度が18%、平成24年度が24%に増加している。逆に「どちらかと言えば不足」「不足」は、平成23年度が82%、平成24年度が75%と減少した。指導力不足を感じている学生が減少しているとはいえ、75%にも達すること自体は大きな問題である。

主な理由の一位、二位には両年度とも「学習指導力不安」「生徒指導力不安」があがっており、教員としての基本的な部分で自信を持ちきれていない姿が見てとれる。

##### 【校種別の傾向】

###### i) 小学校

「どちらかと言えば不足」「不足」と回答した学生は97人（78%）で、その主な理由は、

- ・指導案づくりなど基本的なことがうまくできなかった。
- ・教材研究が甘いと感じた。
- ・子どもの実態がつかめず、子どもの実態に合わせた指導ができなかった。
- ・適切にしかることができなかった。

などである。授業づくりに必要な教材研究や指導案の書き方など、教育実習で初めて自分の力不足を感じている実習生が多い。また、生徒指導についても子どもの実態がわからず子どもとのかかわりに不安を覚えている。学部での講義と実

際の指導場面とのギャップを埋める工夫が必要と思われる。

一方、教員としての指導力が「ある」「どちらかと言えばある」と回答した学生は27人（21%）いる。その主な理由は、

- ・自分の課題に謙虚に向き合うことができたから。
- ・子どもの目線に立って話げできたから。
- ・子どもに積極的に関わり褒め、叱ることができたから。

などである。自己の課題意識を持ちながら、積極的に教育実習に臨んでいる実習生も少なからず存在している。

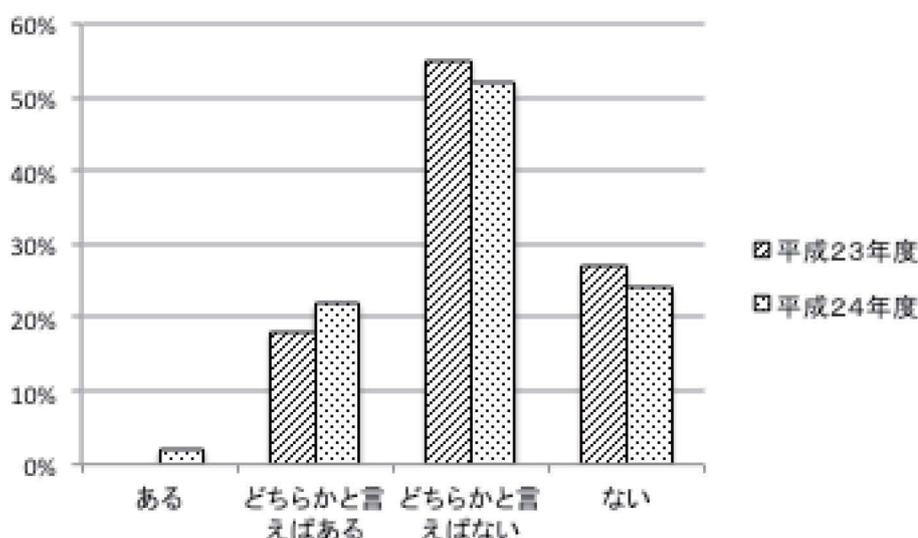


図3は 指導力の有無についての年度別回答

## ii) 中学校

教員としての自分の指導力に対して「ある」「どちらかといえばある」と回答した実習生は、15人（22%）である。その主な理由には、

- ・1カ月という短い間だったが、生徒について少しは理解できたから。
- ・教材研究に力を入れ、生徒に印象付ける授業ができたから。
- ・自分の指導により、数学が嫌いだった生徒を少しは好きと思わせることができたから。

など、小学校と同様に積極的に授業づくりや生徒指導に取り組んでいる姿が見える。一方、「ない」「どちらかといえばない」は53人（78%）である。その主な理由として、

- ・専門教科について指導するための知識が不足しているから。
- ・生徒との距離の取り方が難しいから。
- ・子どもに対して遠慮があったから。

など、中学校では、小学校と比較した場合、自己の専門教科に対する不勉強に気づく学生の多さが目につく。「自信のないのが生徒に見透かされている」と感じ

ている学生もいて、実習の場に来て自己の指導力不足を嘆いている実習生もいる。また、生徒にどう対応すればよいのか迷っている姿も見えてとれる。「叱れない」「指導すべきところで一步踏み込んで指導できない」等、実際に難しい一面をもっているが、生徒指導に前向きに取り組めないことが背景にあるように思われる。

### iii) 幼稚園

教員としての自分の指導力が「ある」と回答した実習生はないものの、「どちらかと言えばある」と回答した実習生は12人(40%)である。その主な理由は、

- ・臨機応変な対応ができたから。(保育においても、作業においても)
- ・けんかやトラブルの際、子どもたちが自分で考えられるような言葉かけができたと思うから。
- ・子どもたちと一緒に楽しく遊ぶことができるから。

など、園児の実態を把握し、園児とかかわることの意味をしっかりと捉えている実習生もいる。しかし、「ない」「どちらかと言えばない」と回答した中には、

- ・言葉かけを迷う場面もあり、言葉一つひとつが難しいと思えなかった。
- ・子どもたちの興味をひく言葉や遊びが、自分にはまだまだ足りないと思うから。

などがある。園児とどう接したらよいのかわからず、不安に思っている実習生が18人(60%)と多い。教育実習で、コミュニケーション能力の大事さや臨機応変に対応することの難しさに気づいてきている。

### iv) 特別支援学校

教員としての自分の指導力が「ある」という回答はゼロだが、「どちらかといえばある」と回答した実習生は1人(10%)で、「子どもと一緒にいることが楽しかった。」と回答している。子どもが好きで、よく子どものことを理解できている実習生であろうか。一方、「不足」「どちらかと言えば不足」と回答した実習生は、9人(90%)である。その理由は、

- ・何ひとつ子どもに身につけていないと感じたから。
- ・子どものことを短期間では理解できないから。

など、講義等では理解できたつもりでも、実際に特別支援の子どもたちの変化を引き起こせなくて無力感を感じ、理論と実際の違いに戸惑っているように思われる。

## ②主免実習生の課題認識(年度別)

図4は、今回の教育実習体験で、もっと理解を深め(探究し)たいと思ったことは何かありましたかに対して「ある」と回答した人数割合であり、図5は「ある」と回答した人が記述した内容を集計したものである。

これにより、理解を深めたい課題が「ある」と回答した学生は、平成23年度が90%、平成24年度が87%と共に非常に高い割合を占めた。その課題内容の上位3項目は共通しており、最も多かったのは指導技術31%、次に発達段階や子どもの理解が25%、3位が教材研究17%となっている。実践的な指導方法を子ども理解や教材研究と関連させ探究したいと思っている実習生が多いことがわかる。こ

れ以外に，中学校の実習生においては，特に生徒指導の具体的方法について理解を深めたいという実習生が15%近くいた。

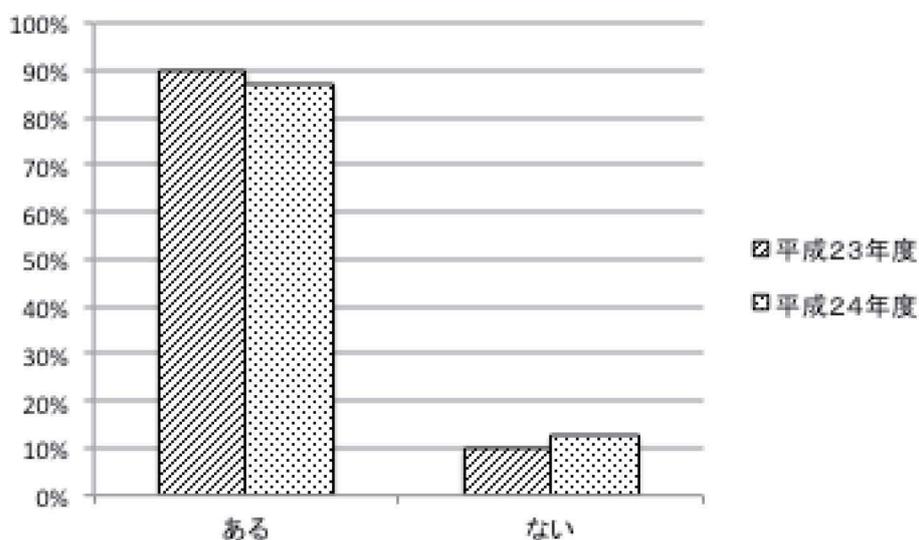


図4 教育実習で、もっと理解を深めたいと思ったことの有無への回答

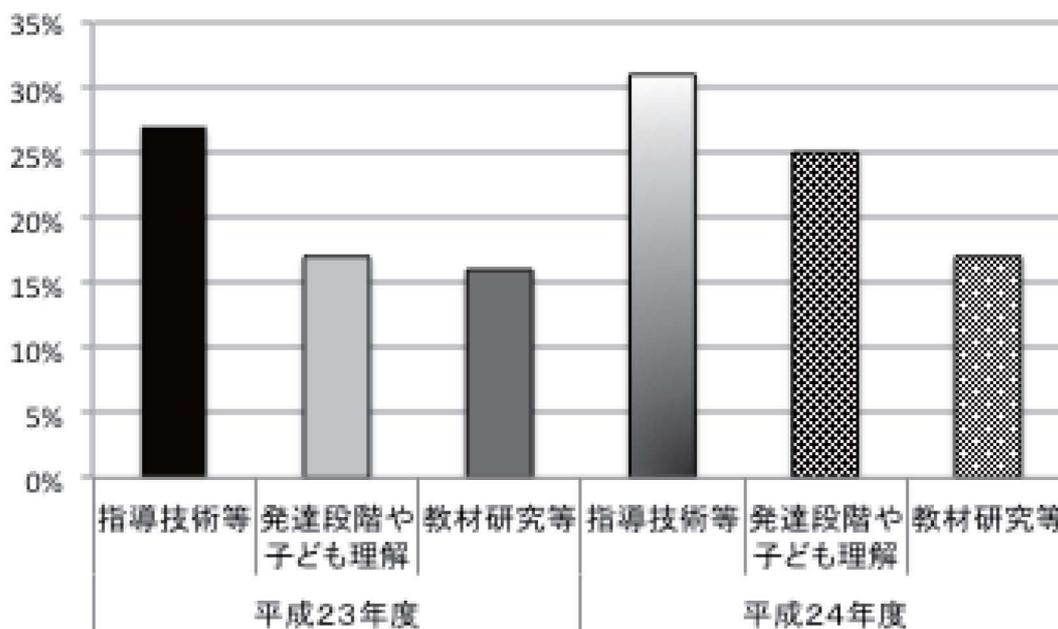


図5 もっと理解を深めたい課題内容に対する記述内容（複数選択）

### ③担任教員による教員としての基礎・基本的知識・技能の事前準備状態に対する評価

#### 【全体的傾向】

図6は，実習生が，教員として必要な基礎・基本的知識・技能の習得を事前準備としてできていたかについて，実習担当教員が評価したものである。全体傾向では，「感じられた」「どちらかと言えば感じられた」を合わせると，67%である。

逆に「どちらかと言えば感じられなかった」「感じられなかった」は、38%と約4割の実習生に事前準備ができていないという回答結果であった。

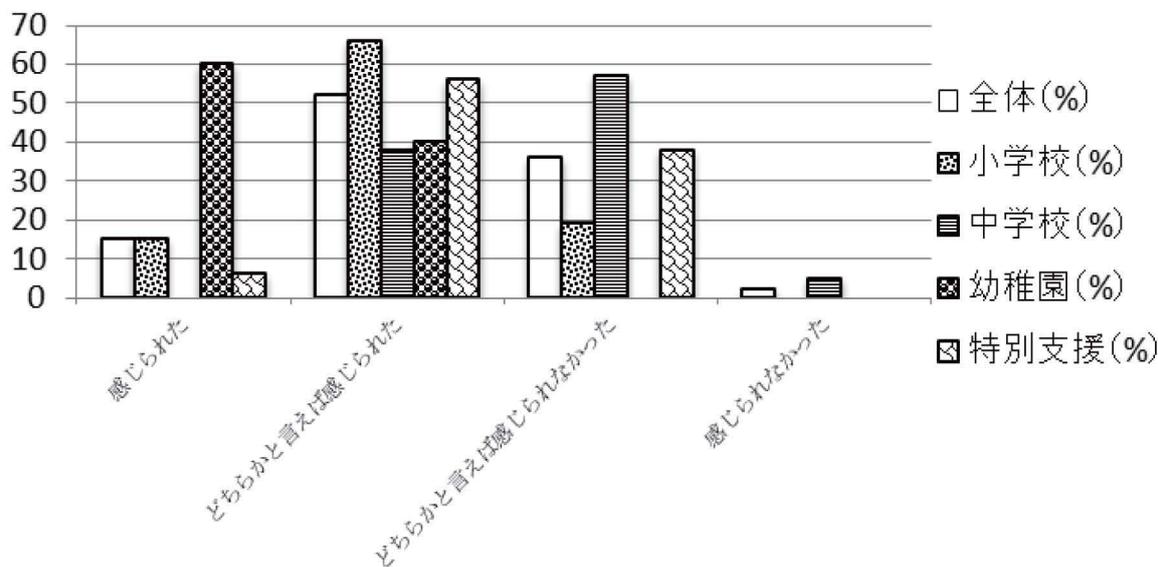


図6 教員として必要な基礎・基本的知識・技能の事前準備に対する評価

#### 【校種別傾向】

小学校、幼稚園のほとんどの実習生は、事前準備がしっかりできていると評価されている。しかし、中学校では事前準備ができていないと評価された割合は6割を超えて最も多くなっている。学生のアンケートでも明らかのように、中学校では3割が教職を望んでいないことを考えれば、実習に対して消極的な学生が潜在的に存在し、その周辺にいる学生へ悪影響をもたらしていることも推測される。特別支援学校は中学校より少ないが、事前準備ができていないと評価された学生は約4割いる。

#### ④指導力の自己評価、課題意識、事前準備状況についての小括

##### 【主免学生にみる指導力の自己評価、課題意識、事前準備から】

実習アンケート全体を通して見たときに、実習に対する事前の学習準備はできていなかったと考えている実習生が多い。その中で、教育実習という実践的な体験を通して直接的に授業づくりに必要な指導案の書き方や教材研究のしかたなど、事前の具体的準備の大切さを痛切に感じている実習生が数多くいることも判明した。これだけ真摯に反省している実習生がいることは、逆に、将来教師になりたいという切実な思いの表れとも考えられる。

実習生は、実習を体験するまでは、学部授業を教職の専門性に関する基本的知識を中心に学ぶものと捉えていたようである。しかし、実習に入った途端、授業をいかに行うかという実践的課題に直面する中で、実践の厳しさや子どもの前に立って指導することの難しさと責任感を十分感じとっているのではなかろうか。このことは、現行の学部授業の中で事前に、授業を作るために考慮しておかなければ

ればならない発達段階や発問、板書など、授業実践において欠かせない基本的技能の習得水準を引き上げる必要性を感じる。また、授業づくりにおいて踏まえておかなければならない、学習指導要領に明示されている目標や内容などの基礎・基本を身に付け、事前に模擬授業等の体験を通して実践体験を積ませることへの対応が必要であることを検討する必要がある。

「教材研究のありかた」「子ども理解のありかた」「指導案の書き方」など実践力を培うための事前準備がもっとできておれば、「よりよい授業づくり」ができたと感じている実習生が多くいた。その点では良質な学生が数多く存在していることを意味しており、改善策の如何によって教員養成機能の充実につながるものとして大いに期待できる面もある。従って、今後、改善策として教育実習の事前の対応をよりきめ細やかにしていくことが重要であると考えられる。

そのため、授業づくりに必要な教材研究の視点や学習指導要領の内容、子どもの実態や発達段階の特徴、授業づくりや子どもとのかかわり方などについて、それぞれの学生がそれぞれにイメージできるような学部授業を工夫していくべきではなかろうか。

#### 【担任教員からみた基礎・基本的知識・技能の事前準備状態の評価について】

「教員として必要な基礎・基本的知識・技能の習得が事前準備としてできていたと思うか」という問いに対して、教育実習にあたって、事前準備ができていない実習生が小・中学校と特別支援学校で4割近くいるということは大変問題である。

中学校や特別支援学校では、他校種と異なり自分が描いていたイメージと違いが大き過ぎたのであろうか。だとすれば、学部授業において理論と現実の実践場面とのギャップを少しでも埋めることが大事になってくる。そのためには、理論を学んだら、実際にはどうなのかを具体的に教育現場で子どもと触れ合ってみるようにはどうであろうか。子どもたちと何度も触れ合う中で、現場の子どもたちへの理解と接し方がわかってくるのではなかろうか。またその中で、実習にはどのような心構えや事前準備をしておけばよいか、自ずとわかってくると思われる。

基本的な心構えはできているが、実習に必要な基礎・基本的な知識・技能の習得などの事前の準備はあまりできていない結果となっている。学生に問題があるのか、学部教育に問題があるのではあろうか。

仮に学生に問題がある場合は、入学選抜のあり方の工夫が必要であり、また、学部教育に問題がある場合は、入学時より教師を目指すという目標を明確にもてるようなカリキュラム作りも必要である。しかも、学生が教育実習に至るまでに、教員として必要だと思われる基礎的・基本的な事柄を、学部授業でしっかりと身に付けさせておかなければならない。さらに、教師としての資質を高める実践的な活動体験の見直しも必要となるのではなかろうか。その一方で、教師としての基礎・基本及び資質の研鑽を自覚的に深めていけるような教育システムも必要となる。

この点に関しては、現在、本教育学部が整備しつつある授業アーカイブシステムの活用が高まれば一定の効果を上げるものと思われる。

### (3) 教育実習充実に向けた学部教育，附属学校園の改善課題について

#### ①主免実習生による学部教育における改善点

##### 【全体傾向（年度別）】

図7は、教員としての資質・能力や実践力の向上を考えた場合、現行の学部授業について見直す必要があると思いますか、に対する実習生の回答結果である。見直しの必要が「ある」「どちらかと言えばある」は、平成23年度が89%，平成24年度が74%と高率を占め、学部授業の見直しの必要性を感じている。平成24年度が減少していることは、学部の授業に少なからず改善が図られつつあることも考えられる。

主な理由（改善点）として両年度とも「実践的な講義内容」があげられ、実習を通して授業づくりに直接かかわる中で感じた戸惑いから生じた改善要求と解釈できるのではなかろうか。

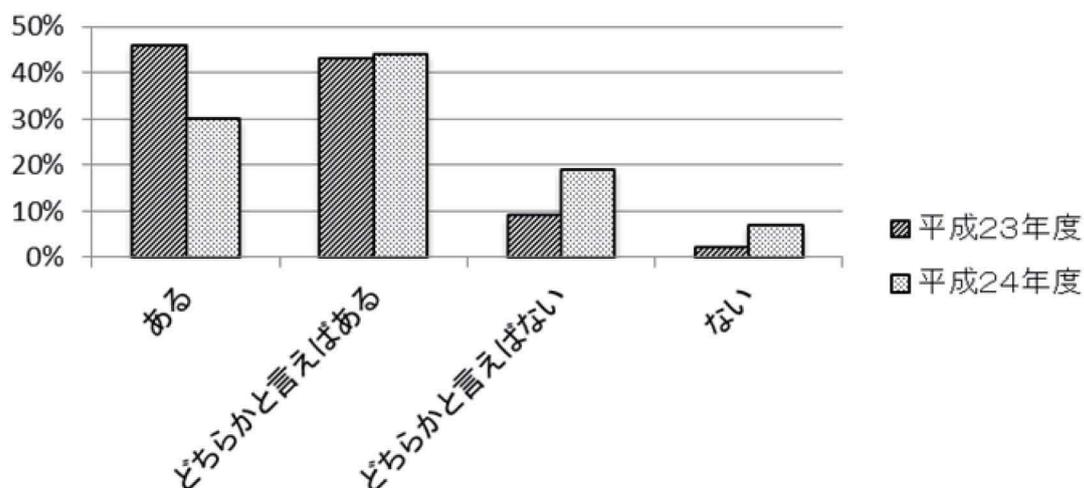


図7 学部授業の見直しが必要かに対する回答

##### 【校種別傾向】

図8は、同じ質問である、学部授業の見直しが必要かに対する回答をコース別に集計したものである。

#### i) 小学校

見直しの必要性が「ある」、「どちらかといえば必要性がある」と回答した学生数は88人（71%，無回答6人を除く）である。その主な理由は、

- ・ 模擬授業などもっと実践的な講義にすべきだと思う。
- ・ 理論に偏りすぎかと思う。
- ・ 指導案づくりの基礎，ねらいの重要性くらいは授業でも教えてほしい。

などがある。模擬授業や教材研究、指導案の書き上げ方など、実践的な講義や授業にしてほしいという要望が 88 人中 66 名（75%）を占めている。

一方、見直しの必要が「ない」「どちらかと言えばない」と回答した学生は 36 人（29%）いる。その理由には、

- ・すべての授業が何らかの形で役立っているから。
- ・現場で学ぶことと、座学で学ぶことには差があるし、そこを補うことは難しいだろう。
- ・教育理論の学びは必要だから。

などがある。学部での授業内容を、必要性のあるものとして受け止めている学生は 3 割程度にしか過ぎない。

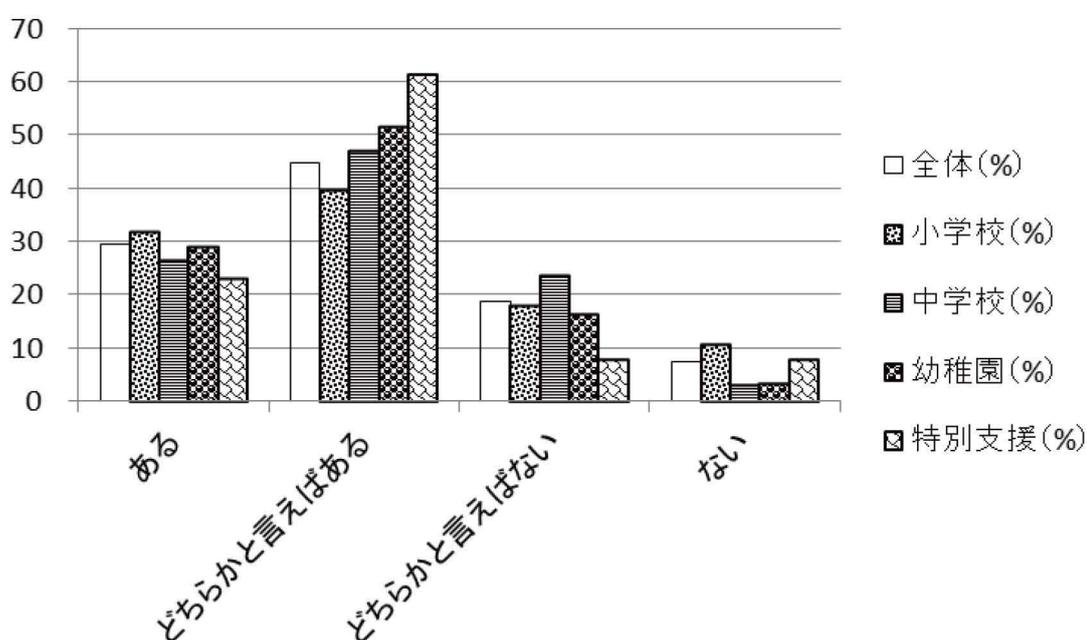


図 8 学部授業の見直しが必要かに対する回答

## ii) 中学校

見直しの必要が「ある」、「どちらかと言えばある」と回答した学生数は 50 人（74%）である。理由には、

- ・概論などについては、現場で使えるものにしてほしい。
- ・机上の学習と現場の状況は大きく違っていたから
- ・専門分野の授業の一部が教育に直結するかという点に疑問を感じるから

など、小学校と同様に授業づくりに関する要望が 50 人中 28 人（56%）いる。一方、見直しの必要が「ない」「どちらかと言えばない」は 18 人（26%）である。その理由として、

- ・特に思いつかない。
- ・教職の授業では確かに必要な指導をされていると思ったから。

・今のままで十分だと思ったから。

など、講義等の内容を肯定的に受け止めた理由を記述している学生もいる。

### iii) 幼稚園

見直しの必要が「ある」、「どちらかと言えばある」と回答した学生数は 28 人 (80%) である。その理由として、

- ・集中講義や蓄積型体験だけでなく、授業にも実践的な技能や子どもとのかかわりを取り入れてもよいと思う。
- ・実践が少ない。
- ・保育現場ですぐ役立つ技術を学ぶ授業がほとんどない。

など、実技の育成を望む声は 24 人中 19 人 (79%) に上る。また、ピアノ伴奏法、手遊びやゲーム、製作物に関わる内容などの具体的な記述もあり、様々な活動や活動場面での実技技能の習得を授業に求めている。

さらに、講義内容のほかに、

- ・集中講義が多すぎて、専任教員も幼児教育専門が少なすぎると思う。

など、教員増の要望があるのは、小、中学校の場合と異なる点である。

### iv) 特別支援学校

見直しの必要が「ある」、「どちらかと言えばある」と回答した学生数は 9 人 (91%) に上る。その理由には、

- ・自分の努力不足以前に、すごく関心を持てる講義が少ない。
- ・「特別支援教育」の在り方や教育の方法のイメージが持ちにくい。

など、実践を意識したものが、9 人中 8 人 (90%) を占めている。児童生徒の事例に応じて個別に措置や対応をしなければならない特別支援学校の特性に基づく講義の必要性を感じているからではないかと推測する。

## ②担任教員による実習指導における改善点の有無

### 【全体傾向】

図 9 は、附属学校園での実習指導において、改善またはより充実すべき点があると思いますか、に対する実習担当教員の回答を示したものである。

4 附属学校園教員の 51% の教員が、「改善の必要がある」と思っている。

幼稚園では、実習にかかわる指導力を十分発揮できたためか、改善するところはないとなっている。

### 【校種別傾向】

#### i) 小学校

小学校では、実習に関する指導に充実感を持ってはいるが、半数を超える 54% の教員が、改善が必要だと回答している。具体的内容として、

- ・大学の教官と担当教員との打ち合わせ、大学の担当教官の実習授業参観など積極的なサポート。
- ・授業数が少ないので、実習事前指導の段階で授業について構想を話し合っておくなどして、授業回数を増してほしい。

- ・ 観察した授業についての協議会や模擬授業などの指導時間の確保。
  - ・ 社会人としてのあり方。
- などがあげられている。

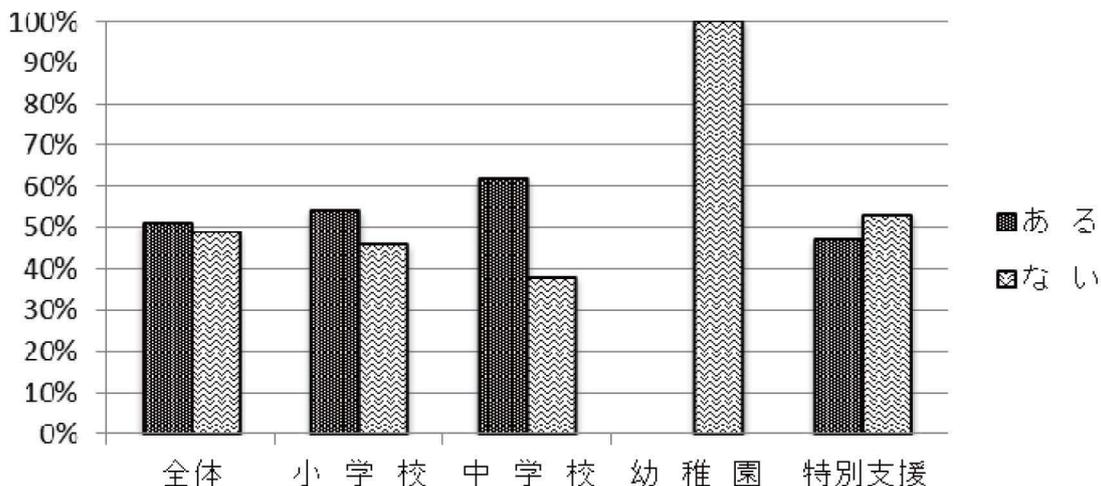


図9 実習指導における改善または充実すべき点の有無に対する回答

## ii) 中学校

中学校では、62%の教員が改善の必要性ありと回答している。その理由として、

- ・ 指導案の作成，教科指導の在り方などさらなる授業力の向上
  - ・ 大学でのより実践的な学習の在り方。
  - ・ 「教員になりたい」と考えている学生が少ないが目的意識を持って実習に臨んでほしい。
  - ・ 言動・服装・感謝の気持ちなど社会人としての基本的な心構え。
- などがあげられている。

## iii) 幼稚園

幼稚園では、実習にかかわる指導力が十分発揮できたと全教員が実感したためか、改善するところはなしとなっている。担任教員も5人と少なく、実習指導方針や達成課題に関する共通理解が教員間で十分深められているのかもしれない。

## iv) 特別支援学校

特別支援学校では、他の学校園とは異なり、過半数の53%の教員が改善の必要はないと考えている。ただ、学校の特性をふまえると、

- ・ 副免として、本当に特別支援の免許を取得する必要があるのか。
- ・ 教師に向かないという実習生には、免許を取らせないことも大事だと思う。
- ・ 1クラスの児童・生徒数に対して実習生の数が多すぎて、十分な実習ができない。

などについて見直す必要があるという指摘もあった。

### ③学部授業及び実習指導の改善についての小括

#### 【主免学生が求める学部授業等への改善内容について】

実習アンケートの本設問の全体を通して見たときに、学部での授業は授業として、附属学校、園での実習は実習として認め、学部の現在の授業を肯定的に捉えている者もいるが、共通して「実践力を培うための学部授業の見直し」への要望が非常に多い。

その実践力については、教職志望「望んでいない」9名中6名も見直しを望んでいる点は見逃ごせない。実践場面に触れ、教職志望ではないにもかかわらず、授業実践等についての専門性への必要性を感じたということは、教職志望の学生にとっては一層深刻な問題となっている可能性がある。そのことも念頭に置く必要があるのではなかろうか。

他方で「実践力を培うための学部授業」の要望は多いが、その具体的内容については十分検討する必要がある。特に幼稚園教育コース生の場合、基礎技能的なものまで授業に求める傾向がある。手取り足取り、微に入り細に入りハウツウ的な技能指導を求めているのではないことを望みたい。

実践力の形成については、授業（保育）実践のねらいや展開をつくるための教材、環境構成を構想する上で必要となる授業（保育）論に関する基礎知識及び技能が求められている。また、幼児、児童、生徒の個々の具体的言動や反応に対する基本的対応ができるためにも、発達の理解が求められている。後者については、実際に子どもとの触れ合いを通して、その子の特性を家族環境や生育歴など踏まえ、経験の中で具体的に理解していく必要があるだろう。授業で指摘できることは、基本的原理や理論であり、実践は常に応用問題であるということについての理解が学生には求められていることも自覚して欲しい。そのためにも、間接的体験として、映像資料等の活用が図られることも必要であろう。

#### 【担任教員による実習指導における改善点について】

限られた時間の中で、重点を見極めながら指導を行ったものの、指導すべき資質項目に対して、担任教員としては時間が足りずに不十分性を感じている傾向が全体として読みとれる。

中学校では限られた時間の中で、優先順位をつけて指導しているようだが、日常の業務に追われ、実習生とのコミュニケーションが不足し、十分なかわりができなかったと反省している教員が少なからず存在する。特に、受け身な態度の学生に対して、担任教員として意図的に仕掛けていくゆとりがないと思われる。

特別支援学校の教員は、児童生徒の指導がうまくいかなかった場合にどうすべきだったかを特に考えさせたいと考えている。それがなかなかうまくいかない一因として、学生自身が自らの課題を具体的に理解していない点があげられている。個々の学生に対してどのように働きかければ、自らの課題に気づけるかが、担任教員の課題と捉えている。

学部ゼミ指導教員に対しては、実習内容に関する打ち合わせや実習授業参観な

ど、学生への積極的なサポートを実習担当教員は求めている。たとえば、実習事前指導の段階で、授業についての構想を学生と事前に話し合ったり、観察した授業についてコメントしてもらうなどがある。学部ゼミ指導教員に対するこうした要望を学部教員がどう受け止めるか検討が必要と思われる。

#### (4) 実習アドバイザーの導入について

##### ① 学生の評価

実習アドバイザーの導入について、図 10 に示されるように、学生全体では 82% が「よい」と評価している。その理由として、「安心感や心の支え」、「客観的な視点からのアドバイス」をあげている。

しかし、図 11 に示されるように実際に利用している実習生は少ない。実習生にとっては、相談する必要まではないが、その存在が安心感につながっていると思われる。また、今回は、初めての導入であり、附属学校側と実習生側が共にどう活用したらいいのかわからない状態からのスタートであった。活用率が低かったのはそのことが主原因と思われる。

幼稚園、特別支援学校では、比較的に実習生の人数も少なく、担当する教員の目が届きやすいということがアドバイザー導入への低さに影響していると思われる。それに対して小学校、中学校では、アドバイザー導入への評価が高かった。利用とまではいかないが、その存在自体が「安心感」につながっていると思われる。

実習生は、初めての現場での実習でわからないことばかりである。また、子どもたちや、現場のめまぐるしさを目の当たりにして、不安と戸惑いを抱えている。さらに、時間の制約も加わり、授業準備が十分できないことも、実習生の不安を増大させているのではなかろうか。アドバイザーの存在意義は、そうした不安への人的支援体制があることを示すことで、学生にとっては安心の拠り所となっているように思われる。

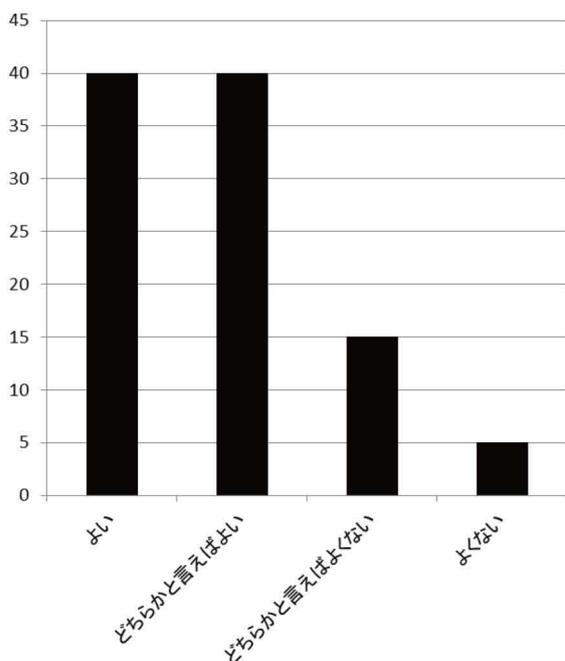


図 10 実習生の評価

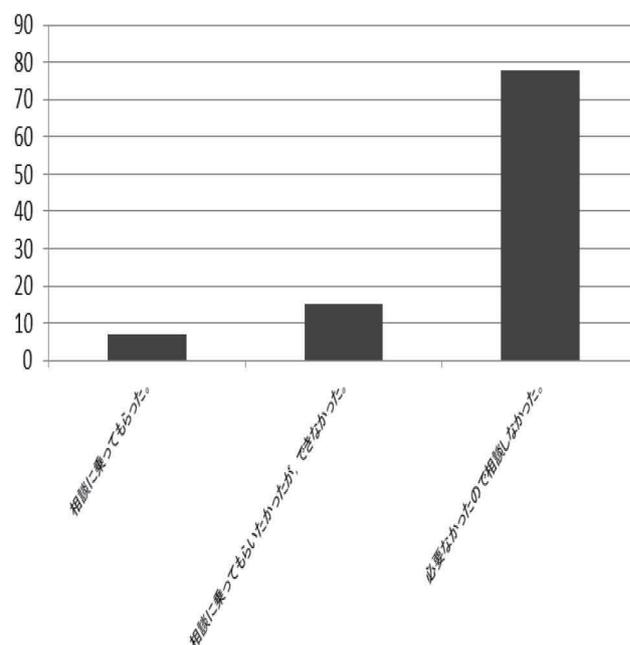


図 11 実習生の利用率

しかし、一番の問題点は「時間」である。中学校は、空き時間があり、その時間に相談できた学生がいた。小学校は、一日中、子どもたちと生活を共にするので、ほとんど空き時間はなかった。計画の段階で、教諭とアドバイザーが役割分担を行い、アドバイスを受ける時間をどこかに設定する必要があるのではなかろうか。

今後の改善策として、夏休み期間を利用して事前の準備からアドバイザーがかかわり、より客観的な視点から、実習生を見たり、かかわったりすることがタフな教員を育成することにもつながると考えられる。アドバイザーを有効に活用するためには、実習前にアドバイザーの役割や機能について十分に実習生や附属学校園に周知させることが必要であろう。

## ②実習担任教員の評価

全体としては、図 12 に示すように、71%の教員がアドバイザー導入の必要性を認めている。しかし、校種によってその必要感は異なっている。特に小学校と中学校は、80%の担任教員がその必要性を認めている。

小学校の担任教員は、具体的なかかわりを実際にもてたという実感から、導入の必要性について以下のような指摘をしている。

- ・指導教諭とは違った立場で実習生の相談に対応することができ、実習生を広い視野で見ると、担任が気づけない学生の変化や異変に気付いてもらえる。
- ・附属小学校教員のみでの対応が難しい事例もあるため。
- ・他の職務中にアドバイスをいただくことは、時間の効率化にもつながる。
- ・気になる学生について、個別に観察、対応をしていただくことができた。担

当でフォローできていないところを支援いただきありがたかった。

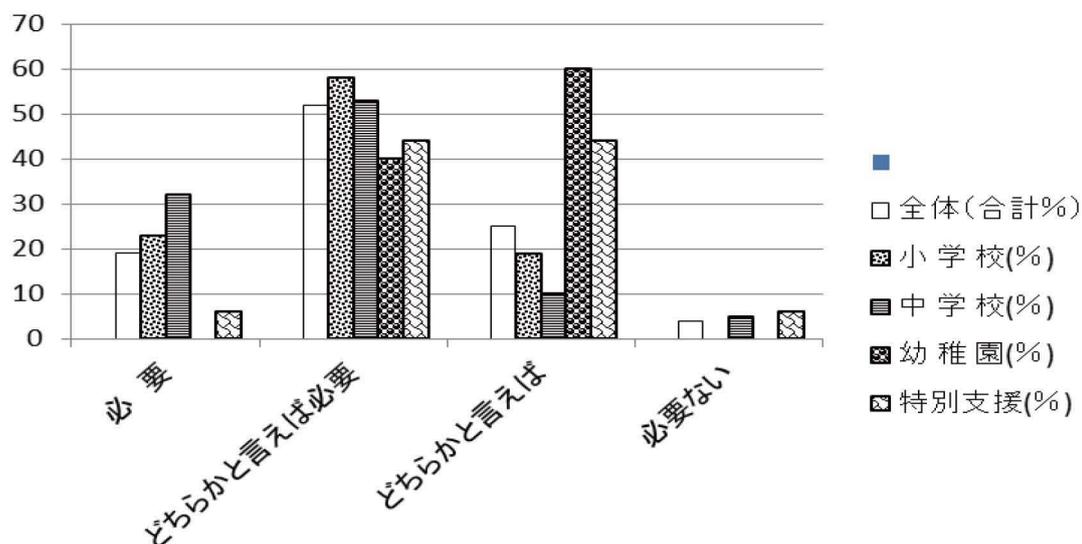


図 11 実際に利用した実習生の利用率

中学校も同様に多くの教員が必要性を認めている。

一方で、幼稚園は 40%、特別支援学校は 50%の比較的低い評価率となっている。今年度初めての導入ということもあるが、幼児教育や特別支援について、実習上での専門的アドバイスがどこまでできるか確証がつかめなかったことなども関係していると考えられる。また、幼稚園の教員は、実習担任教員との指導の一貫性に不安や危惧を抱いていた面もある。特別支援学校については、他の附属と違って、距離的に離れた場所に位置し、アドバイザーが訪問する機会が必ずしも十分でなかった。そのため教育実習アドバイザーについての理解や必要性の度合いも不十分なものとなったのではないと思われる。

今回の実績を踏まえると、次の一点により実習アドバイザーの維持は今後とも必要と理解している。

- ・実習生の中には、かなり不安を感じている学生もおり、第三者的な立場からの相談者を求めており、実習指導の一環として必要と思われる。

しかし、次のような問題もあり、今後の共通理解を図っていく必要があると思われる。

- ・悩み相談なら良いが、指導案づくり・指導法については指導教員との違いがあると困る状況が出てくる。
- ・実習上での悩みは、本来は実習の担当教員が担うべきものであり、担当教員に相談しないと課題は解決しないのではという疑問がある。
- ・実習アドバイザーが具体的に何をしているのか知らないという疑問がある。

#### 4. おわりに

主免実習生の教職志望率は予想以上に高く、平成 23 年度が 77%、平成 24 年度が 78%を占めている。また、教育実習に対する姿勢もについても、ほとんどの実習担当教員が学生の基本的な心構えができていると評価している。

その一方で、実践的指導力についての学生の自己評価は非常に低い。全体で見ると、指導力が「どちらかと言えば不足」「不足」と感じている学生は、平成 24 年度で 75%に達する。しかも、教育実習体験の中で理解を深め（探究し）たいと課題意識をもった学生は平成 24 年度で 87%と非常に高い割合に達する。

基本的問題は、教職への願いや希望、そして教育実習への学生の積極的姿勢を、実習での達成感につなげる実践力の指導・援助を、学部教育と附属学校園がどこまで支援できているかではなかろうか。学生の視点に立ち、学部教育の個々の授業科目の内容改善とカリキュラム体系の改善が求められていると思われる。

それと同時に、各主免実習生ごとに抱える諸問題についても、当面可能な現実的解決策を講じていく必要があるように思われる。

教育実習に関する調査を行えば、学生から「大学の授業は役に立たなかった」、などという苦情は、どこの教員養成大学・学部でも聞かれる。それに対して、「教育実習では、細かなことばかり指摘され、大学で学んだことを実際に試みることは出来なかった」という声も少なからずある。この背景として、学部教員と実習校である附属学校園の指導担任教員のコミュニケーション不足があることは否定しがたい事実ではなかろうか。各附属学校園における教育実習で、指導担当教員が学生に求めている実践的課題や資質について、学部の教員がどの程度理解しているであろうか。その一方で、学部での教育内容と教育実習との関係性、また実習実践での具体的意味についても曖昧なまま、学部授業が進行しているという可能性も否定できない。

今回の調査結果を踏まえて、今後の学部教育と附属学校園での実習体験が、学生にとってより実りのあるものとなる議論につながることを期待している。

#### 参考文献

- 田中耕治編（2007）『よくわかる授業論』ミネルヴァ書房  
ドナルド・ショーン，佐藤学・秋田喜代美訳（2001）『専門家の知恵』ゆみる出版  
フレット コルトハーヘン武田 信子・今泉 友里（2010）『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社